

埼玉県立不動岡高校

「知の総合化」を目指し 考えさせる進路指導で 知識のすそ野を広げる

埼玉県立不動岡高校は、「Fプラン」により自ら考え行動できる生徒の育成を目指す。系統的な進路学習により知識のすそ野を広げ、知識を結び付ける経験をさせることで、社会に出た後も伸び続ける力を育んでいる。

自分自身と向き合い 葛藤する経験が重要

不動岡高校が「総合的な学習の時間」で行う「Fプラン」は、自分の将来を見据えて自ら学び、考え、行動できる生徒を育成するための進路学習だ。1999年度から3年かけて目標や内容などを整備し、02年度の1年生から本格的に導入した。当時、課題となっていたのは、勉強はするものの自分に自信が持て

ず、目的意識もなく漫然と進路を考えさせる生徒の姿であった。そこで「Fプラン」では、「選択力」「社会力」「表現力」の三つの力の育成を目指し、1年生は「自分を知り、社会を知る」、2年生は「体験的に知を深める」、3年生は「知を総合化し、表現する」を目標として、3年間の系統的なプログラム（P.14図）を構築した。

進路を選ぶ力を付ける上で、学問や職業の知識は欠かせない。「Fプラン」でも系統的な職業研究や学部・学科研究を行うが、最も重要なのは、そのプロセスを通して生徒に「揺さぶり」をかけることだと、久保島昌一教頭は強調する。

「理想と現実の間で悩み、考える経験そのものが、生徒を大きく成長させます。葛藤の中で、生徒は自分と向き合い、時に妥協しながら進む道を絞り込んでいくのです。葛藤の場面をいかに多く用意できるか、教師が意図的に仕掛けられるかという

視点で、進路学習を効果的に進める上で欠かせません」

葛藤するには、何よりもまず生徒が自分自身と向き合わなければならぬ。1年生の5月に行う「自分史ノート」は、小・中学校時代での「印象的な出来事・人物」「好きだったこと、興味があつたこと」「なりたかった職業」を書き、自分自身の歩みを振り返る取り組みだ。

「進路選択で大切なのは、何よりも自分自身に関心を持つことです。

埼玉県立不動岡高校

◎1886年に私立埼玉英和学校として開校、1921年に埼玉県に移管され、48年に現校名に改称。2007年度に半期ごとに単位認定を行うセメスター制、65分授業を採用。08年度には進学重視型の単位制に移行し、生徒の志望に応じたきめ細かな教育を展開している。

設立 1886(明治19)年

形態 全日制・単位制／普通科・外国語科／共学

生徒数(1学年) 約360人

10年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、金沢大などに81人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、早稲田大など延べ773人が合格。

住所 〒347-8513 埼玉県加須市不動岡1-7-45

電話 0480-61-0140

Web Site <http://www.fudooka-h.spec.ed.jp/>

図「F-プラン」の進路学習・小論文学習等

学年	学期	目標	実施事項
1年	前期	職業観・学問観の育成、自己理解	<ul style="list-style-type: none"> ・学習リサーチ ・自己理解「自分史ノート」 ・進路講話 ・入試研究Ⅰ ・職業研究
	後期		<ul style="list-style-type: none"> ・進路講話 ・入試研究Ⅱ ・学部学科研究Ⅰ
2年	前期	職業観・学問観の深化、自己探求	<ul style="list-style-type: none"> ・学習リサーチ ・自己理解「10年後の私」 ・卒業生との懇談会 ・学部学科研究Ⅱ ・修学旅行事前学習 ・大学見学会、報告会
	後期		<ul style="list-style-type: none"> ・教養講座 ・進路講話 ・入試研究Ⅲ
3年	前期	進路実現への努力、進路決定	<ul style="list-style-type: none"> ・個人研究(論文作成) ・卒業生との懇談会 ・受験校研究、入試研究Ⅳ ・進路講話 ・大学見学会 ・小論文実践指導
	後期		<ul style="list-style-type: none"> ・個人研究発表会

*学校資料を基に編集部で作成

土台となるのは、現在の自分です。

自分を理解しないまま、未来ばかりを考えさせたのでは、どこかに本当の自分がいると思いきや、どこかに本当の自分がないと後悔を生まないで済ませないためには、自分を客観的に見つめる経験は必要です」(久保島教頭)

自己理解の過程で気付く、他者とのかわりも進路選択のポイントになると、進路指導主事の岩崎誠一先生は話す。

「『先生との出会いが人生を変えた』『看護師さんの優しさが励みになった』など、他者から喜びを与えてもらった経験は、前向きな人生観

を育み、進路を描く上でのロールモデルにもなり得ます。自分を見つめるだけではなく、他者に何が出来るのかという視点も持つてほしいと思います」

「10年後の私」で近い未来を考えさせる

「自分史ノート」を土台に高校卒業後を見つめるのが、2年生5月の「10年後の私」だ。「高校卒業時」「6年後」「10年後」に、それぞれ「自分はどういう生き方をしているか」「社会はどうなっているか」「自分の職業」という観点で未来を思い描かせる。

大学入学から就職まで綿密に計画を立てる生徒もいれば、大学卒業後がほぼ白紙という生徒もいる。「将来を見据えている生徒とそうでない生徒の差が顕著に出る取り組み」と、神田恵美子先生は指摘する。

「友だちが内心では真剣に将来を思い描いていることに衝撃を受けて、『自分も考えなければ』と思う生徒もいます。漫然と進路を考えている生徒にとっては大きな刺激になっていきます。ただし、この時点で『早く決めなさい』とは言いません。受験に向けて力を付けていくこの時期に、進路選択という現実と向き合い、葛藤させることが狙いなのです」

発表の場を与え知識のすそ野を広げる

「F-プラン」でもう一つ重視するのは、進路学習で得た知識やスキルを基に、考えを広げて知識を総合的に捉える体験である。

その体験に有効な手法がディベートだ。論理的な思考力や表現力、コミュニケーション力を付ける上で有効であり、テーマによっては社会や

理科など広範な知識が必要になるからだ。後藤範子先生は、テーマにかかわる講義を聞いたり、さまざまな文献を調べたりする活動を通して、「知識のすそ野を広げる」ことが重要であると言う。

「受験を意識するあまり知識を詰め込むだけで、生徒の学力は細くなっていると感じます。『F-プラン』の狙いの一つは、社会や人生を広く見せ、知識のすそ野を広げ、考える力を高めることです。例えば、一つのデータも反対側から見ると別の意味を持つということが理解できれば、社会に対するものの見方を養うことが出来ます。必ず訪れる進路選択の場面で、生徒自身がさまざまな知識を結び付け、総合的な知の土台をつくり、判断材料を増やすことが出来るようになる。そうすれば将来の展望も広がり、ひいては大学進学後の学びへの意欲も高まるのではないかと期待しています」

発表の機会を設け、生徒に自信を付けさせることも、ディベートの狙いの一つだ。「自信を持たせ、進路を前向きに考えさせることも、『F-プラン』の

重要なポイントです。本校の生徒は中学時代には成績が良く、クラスで発言する機会も多かったと思います。しかし、高校で同じような学力の仲間と交わる中で、次第に自信を持ってなくなる生徒もいます。発表の



埼玉県立不動岡高校教頭
久保島 昌一 Kuboshima Shoichi
教職歴32年。同校に赴任して2年目。「常に『複眼思考』」



埼玉県立不動岡高校
岩崎 誠一 Iwasaki Seichi
教職歴20年。同校に赴任して9年目。進路指導主事。「生徒の可能性を広げる進路指導を心掛けたい」



埼玉県立不動岡高校
後藤 範子 Goto Noriko
教職歴29年。同校に赴任して6年目。国際理解教育部主任。「いつも明るく楽しく！」



埼玉県立不動岡高校
寺田 弘 Terada Hiroshi
教職歴26年。同校に赴任して7年目。進路指導部。「今を生きる」



埼玉県立不動岡高校
神田 恵美子 Kanda Emiko
教職歴20年。同校に赴任して4年目。保健相談部。「その時に出来ることを悔い無きよう」

場を与えることで、『やれば出来るんだ』という手応えを感じてほしいと思っています」（岩崎先生）

論文作成を通して 自分自身と向き合う

「Fプラン」の最終目標は、体験的な学びを通して得た広い視野、さまざまな知識、将来の志望を総合化し、社会に出てからも通用する骨太の力を身に付けることにある。その集大成となるのは、3年生で行う「個人研究（論文作成）」である。4月下旬に志望に応じてテーマを設定し、半年以上かけて研究し、11月上旬に発表する。

生徒は自分で決めたテーマに基づいて文献に当たり、職業・社会研究等で得た知識や授業で学んだ内容を駆使して論文を書き上げる。成否の鍵となるのはテーマ選びだ。テーマが漠然としていたり、内容とずれていたりする場合は、担任がテーマの見直しや参考文献の再検索などを指示する。時には、一からテーマを練り直す生徒もいる。

生徒は論文作成によって学問を深めながら、実は自分と向き合っているのだと、後藤先生は言う。

「テーマを検討したり、研究を進めたりする過程で、自分の志望と志向のミスマッチに気付く生徒は少なくありません。同じ心理学でも臨床系と実験系ではまるで違うことに気付き、志望校を変更した生徒もいます。論文を作成する過程で、生徒は何がしたいのか、何になりたいのかということをも自分自身に問い掛けているのです」

「知の総合化」の経験が 進学後の伸びを左右する

「知の総合化」を体験させることの意義を、久保島教頭は次のように強調する。

「今の学問の潮流は、理系や文系を超えた『学融合』にあります。そうした動きに対応するためには、高校時代に、分野の違う、さまざまな知識を結び付ける経験が必要です。論文の巧拙自体はそれほど問題ではありません。知識を結び付ける経験

こそが、目的意識や進学後の伸びに大きく影響するのではないのでしょうか」

同校での進路学習の経験は、卒業後も心に大きく残るようだ。大学で卒業論文を書く際に振り返りをしたことから、自分の「個人研究」を見に来る卒業生がいたり、新入生に対して見本デイベートを行う際には発表者として卒業生が喜んで協力してくれたりするという。

今後の課題は、「Fプラン」に対する教師の意識共有である。進路指導部の寺田弘先生は述べる。

「学力には、目に見える力と目に見えない力があります。社会では後者の力がより求められますが、授業だけで身に付けさせるには限界があります。総合学習は、その突破口になると考えています。ただ、『Fプラン』が始まった当初とは教師も変わり、取り組みに魂が入っていないと感じる側面があります。生徒の状況を踏まえ、一つひとつの活動の目的や意義を改めて考える必要があると思います」